

絶頂監獄2 体験版

※ 時は西暦2011年、ESPイー・エス・ピーと呼ばれる超能力者の存在が珍しくない時代——太平洋に浮かぶ小国・バルジハル王国と、テロリストとの内戦は激化していました。

国連軍は対テロ総合戦略司令部(オルタ)を派遣しますが、第八特別機動小隊の隊員、レジーナ、ドロシー、キャンディらは敵に捕まり、海底基地に幽閉されてしまいます。そこでは女を調教し、女が絶頂時に放つオルガエネルギーを機械的に搾取するという狂気の人体実験が行われていました。レジーナら女軍人も肉体的に調教され、オルガマシンで強制的に絶頂し続ける淫らな肉体に改造されています。

テロリストのボス・ウルフは、レジーナの頭部に穿孔手術を施している間、ドロシーとキャンディを拷問室に召喚し、残虐きわまりない、ある恐るべき肉体調教を開始するのです——。

二人の女囚は、ドアを挟んだ隣の拷問室に連れ込まれ、天井から降りた鎖で両手を結ばれて吊るされていた。

「くっくっ……手が干切れるっ！」

ドロシーとキャンディは痛みに身悶えている。どうか足先が届く高さに体を吊り上げられた状態でキープされているのだ。全裸の若い女体が脂汗を浮かべ、白い肌が濡れていく様は痛々しくも艶やかである。

「いい格好よ、二人とも。敵の手に落ち、拷問される国連軍の女兵士……うふふ、こういうシチュエーションって燃えるわね。こちらは悪役らしく、こんな物も使ってしまうわ」
ウルフは小脇に抱えた、黒い大きな容器の蓋を開けた。ホルマリン瓶に似たその大きな容器の表面には生物兵器を意味する三重丸のシールが貼られていた。中身はドロシーとキャンディの位置からは見えないが、黒っぽいドロブ水のような薬液が溜まっているようだ。その暗黒水がちやぷりと波打ったかと思うと、うぞうぞと細長い寄生虫が這い上がってきた。

「きゃああ?!」

キャンディは悲鳴を上げた。その虫は、サナダムシ、回虫、列島条虫……という人間の腸内に寄生する、あの見ているだけで鳥肌が立つような、ヒトの原始的な恐怖を喚起するグロテスクな寄生虫であった。

その虫が、ウルフの手首に這い上がってくる。一匹や二匹ではない。ウルフは慌てず騒がず何匹かを指先で捕まえると、慎重に蓋を閉じて残りの虫を封じ込めた。

うねうね……ウルフの手の中で黒くヌメついた寄生虫が、気味悪くのたくっている。そういった細長い弾力のあるワイヤーの体を曲げてウルフの指に絡みつき、どこかに逃げ道はないかと探しているようだった。

「こいつらは、うちの研究班が開発した人工の寄生虫なのよ。名称は未定だけど、そうね……仮に『媚毒虫』とでも名付けましょうか？ 生物学的な分類では、条虫類に近く、人間の体組織なら血管以外のドコにでも寄生するわ。口も消化器官も持たないけど、皮膚から直接宿主の栄養分を吸収、栄養素を分解したとき発生する体液はヒトの体内で科学反応を起こし、宿主の体に媚薬成分を排出する……」

——つまり、こいつに寄生された女は常にリビドーに渴した、欲情しつ放しの性欲奴隷になるという事ね。うふふ……この虫の有益さが分かってもらえたかしら？」

「ひいひい！ そ、そんなキモチ悪い虫をどうするつもりなの!？」

キャンディが血の気の引いた顔で叫ぶ。この監獄施設の容赦ない拷問の数々を思い返せば答えは最初から分かっていた。

果たして、ウルフの返答は予想通りのものだった。

「もちろん貴女達に実験台になって貰うのよ。この媚毒虫の効果を、その身を持って体感して貰うわ。うふふ」

「い……いやあああーっ!! 絶対イヤ!! そんな虫を体に入れられるなんて!! そんな事されたら死んじやう!!」

キャンディは半狂乱になって暴れだした。がちやがちや、と鎖が揺れて音を立てる。少女は虫が大嫌いだっただけ。

「死にはしないわ。ただ体が死ぬほどビンビンに発情するだけよ。その結果、ストレス発作で死ぬことはあるかも知れないけど。何せまだ実験段階だから」

臨床実験はした事ないのよね——と、ウルフは秘密を打ち明けるように小声で言い、くすくす……と笑った。ドロシーもキャンディに劣らず、今にも倒れそうなほど顔色を失っている。

ウルフの指の合間で、黒いハリガネ虫は新鮮な体液の流れる肉窟を求めて、うねうねと蠢いている。

「まずはキャンディ……貴女よ。忍耐強いスパイの貴女なら、これくらいの汚辱は耐えられるわよね？ 今までの拷問にも屈しなかったんだから」

ウルフはキャンディの両膝を手で割った。ぎりぎり爪先が接触するだけの自由しか与えられていない少女に反抗の余力など残されていない。寄生虫を摘んだウルフの指先が少女の股間に伸びる。

「あたしはスパイじゃないんだよおお！ 最初から言ってるじゃん！ 初めて実戦に投入

された、ただの二等兵なんだってばああ！ 虫はイヤッ、寄生虫だけは堪忍して！」

「だーめ」

ずぶりっ！

「——ぎやうツ?!」

尿道口に冷たいものが触れたと思った瞬間、尿道の中に何かが這入り込んできた。キャンディの小さな体がピンツと引き攣る。ウルフの指の橋を渡り、寄生虫がなんと尿管に侵入したのである。

「あぐっ、あぎい!? ひいい、何れえ、お、オシッコの穴ああ!？」

てつきり女性器が標的にされていると思っていたので、その衝撃は不意だった。キャンディは唇の端から涎を垂らしつつ、体内に虫が這入り込んでくる究極の苦悶に喉を反らし、身悶えた。

にゆるにゆる……世にもおぞましい感触がキャンディの排水の穴を遡っている。寄生虫は細い身をくねらせ、尿道の狭い穴を奥へ奥へと上っている。キャンディの哀れな体が電氣的に引き攣り、びくびくっと跳ね回るのをウルフは面白がって眺めている。

「うああああああああああ!!」

キャンディは絶叫した。大嫌いな虫が体内をさかのぼり蹂躪していく、その恐るべき波に揉まれ、ツインテールの少女は蛇のようにのたうった。——しかし、ウルフの悪魔的なサディズムは肉奴隷のその程度の苦悶では満足しなかった。彼女はもう一匹、寄生虫を指に這わすと、すかさずキャンディの小便穴に挿入した。

「!! かッ、カハアッ………!!」

ちゆるるるる……ちゆるちゆるちゆるるる！

キャンディは大きく目を見開いた。虫が下腹部を登っている。臍の下が熱く燃える。一匹でも死ぬほどグロテスクな寄生虫が、さらにもう一匹。狭苦しい肉の洞窟を体節もない滑らかな虫が蠕動して進み、アンモニア臭い壁と壁の間に身を滑り込ませて尿洞へのレイプ行為を繰り返す。

——ずっと尿が出ているような感覚。しかし、出ているのではなく入っているのだ。尿道口がパクパクと開き、柔らかな尿壁がギューギューと不規則に収縮した。二匹は競うようにキャンディの奥へと入り込んだ。そして不随意筋の肉門を開き、ついに膀胱に達した。握り拳ほどの大きさの肉袋である。そのアンモニアのスープが充滿した場所が、寄生虫の新たな棲家となるのだった。

「あああ……あああああ」

鎖に吊られたキャンディはほとんど正気を失いかけていた。目と口からは涙と涎が垂れるままになっている。己の内部を恐るべき方法で汚辱された苦悶と絶望。寄生虫を宿された腹部の燃えるような熱さ。金色の髪はほつれて乱れ、汗で顔にへばりついていった。

「へぐうう。あたしの中にい、オシッコ穴の中に、虫が這入っちゃったあ。酷い、酷いよ

おお。うっうう。嫌だあ、中で動いてるうう……!!」

膀胱の中で、異物が蠢いているのが分かる。重さなど感じなかった膀胱という肉袋が今は重く、たっぷりとオシッコが詰まっている感覚なのだ。膀胱だけではない。尿道全体が何となく重く、じんじん……と芯が灼けるような熱さに包まれている。早速、媚毒の効果が現われ始めてきたのである。尿道口、尿管、膀胱などがクリトリスのように敏感に鋭く尖っていくのは異様な感覚だった。

キャンディは己の体の変化に戸惑い「ひっひい」と短い悲鳴を上げて、鎖の下で細い腰をくねらせた。唇からは涎が垂れ、頬を熱っぽく赤らめて、困惑した顔でドロシーのほうを見た。キャンディのその顔はあからさまに発情していた。

「ド、ドロシーいい……助けてええ。か、体が熱い。お、おしっこの穴があ、溶けそうだよう……!!」

キャンディは悪魔の手によって、排尿だけでイってしまう変態的な肉体に造り替えられていた。そしてもう二度と元の健康的な体には戻れない。肉欲の地獄への片道切符を手渡されたのだった。

——いつも明るい少女の、媚毒で性体感覚を操作された拳句、焦点の定まらなくなった金色の瞳が、ドロシーをぼんやりと見つめていた。

「ひいひい……!!」

ドロシーは怯えて震え上がった。奥歯がカチカチと鳴る。大きな尻肉が恐怖でゼラチンのように淫靡に震える。

あんなグロテスクな寄生虫を体内に挿入される……体の中で飼育する。常に発情した淫乱な肉体に変えられてしまう。焦点の合わぬキャンディの、あの目。人間的な知性を失った白痴のような、あの瞳。

「ひいひいひいひいひい!!」

ドロシーの恐怖が臨界点に達した。そして気づくと彼女は涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにして「寄生虫を入れないで下さい!」とウルフに嗚咽混じりに懇願していた。彼女は獣か赤子のように吠えて鎖を揺すりながら何度も同じ文句を繰り返した。

「うふふ……寄生虫はそんなに嫌? 私は結構可愛いと思うけど」

ウルフは指にあの寄生虫を摘んでいなかった。500cc目盛りのグラスファイバーの浣腸器を、その両手の間に抱えていた。浣腸責め?……その程度の責めで寄生虫を赦してもらえるなら、どんなに苦しい浣腸にもドロシーは耐えるつもりだった。

「や、やります! お、お浣腸責めでも何でも耐えます! だから……だからっ、寄生虫を体の中に放つのは勘弁して下さい! お願いです!」

「はあ? 何を勘違いしてるの? 馬鹿ねえ」

にやりと残酷に唇を歪めたウルフの次の行動は、ドロシーの善良な魂が想像しうる範疇を遥かに超えていた。——ウルフはホルマリン容器の中に浣腸器を沈めると、目盛りいっ

ばいに黒い薬液を吸い上げたのだ。透明なシリンドラーの壁にハリガネ虫が浮き上がり、黒水の中を何匹もびちびちと泳いでいる。黒い薬液とともに寄生虫を浣腸器の中に吸い込んだのである。

その浣腸器を、ドロシーの目の前でピュッと少量放ってみせる。

「二十匹くらいいるわ。ドロシーはキャンディの先輩なんだから、これくらい耐えられるわよね？ テロリストが開発した生体兵器で体内から陵辱される国連軍の女兵士……うふん、想像しただけでアソコが熱くなっちゃうわ」

ウルフは汗まみれでぶるぶる震えるドロシーの大きな尻丘を指で割り、その中心に固く窄む菊門に先端を突き立てた。

「え？ え？ 何をするんですか？ まさか……そんな、嘘ですよ？ いくら何でもそんな事……あはは、そ、それを私のお尻に浣腸するなんて——嘘おお!! いやああああああああああ!!」

「どんな浣腸でも耐えるんでしょう？ キャハハ！」

ドロシーの死に物ぐるいの尻振りダンスと絶叫は、ウルフの嗜虐性に薪と油を注ぐだけだった。

浣腸器の尻を押すと、冷たい薬液がずるずる……と容赦なくドロシーの腸内に這入り込んでいった。ドロシーは息をする事も忘れて、その感覚に全力で抗った。顔を赤らめ、腹筋に力を込めて肛門から薬液を排出しようとする。しかし、強圧ポンプ式の浣腸器の前には無駄な抵抗であった。バイオハザード級の媚毒寄生虫が二十匹も混じった薬液が、ドロシーの繊細な腸内を逆流していく。

腹の内部にワイヤー虫が流れ込んでくるのが……分かる。

「うぎやああ!! やめっ、赦し、赦してええ!! お浣腸を止めて下さい!! 本当に何でもします!! だから……だからあ!! 二十匹もお腹の中に寄生虫が入ったら、わたし死んでしまいますううう!! ぎやあああつ、うっごお、んごおぐうえええええ!!」

ちゅうううう……ゆっくり過ぎるほど緩慢な無限のように終わりなき浣腸地獄に、ドロシーは目の前が暗くなっていった。足先をピンツと伸ばした不自由な姿勢で、びくびくと痙攣しながら白目を剥いていた。

そうしながらも体内には寄生虫が休みなく注入され続け、その信じがたい強烈な汚辱と絶望の嵐は夢の中でも変わらず少女の理性を蝕んだ。

「はい、お仕舞いっつ。うふふ、浣腸しながら私がイってしまったわ」

ウルフはノズルの尻を押し込み、最後の一滴まで浣腸器の中身を注ぎ込んだ。先端を引き抜くと、半ば条件反射でピューッと薬液が尻穴から排出されたが、床に溜まった汚水の中にあの寄生虫は一匹もいなかった。

ウルフのドレスの下の股間は熱い愛液でびちゃびちゃに濡れていた。

「ううう……ううううう」

寄生虫を体内に注入された二人の女囚は、ぶるぶると体を震わせている。腹中で媚毒が休みなく放出されており、下半身がもげそうなほど痒く、熱い。

——寄生虫を二匹入れられたキャンディは、恍惚たる快楽に焦点を失うほど感じていた。最初こそ精神的なショックと体内に感じる異物感に狂わんばかりだったが、しばらくすると媚薬の効果がメンタル面の嫌悪感を上回ったか、鎖で吊るされながら股間をモジモジと擦り合わせて牝犬の顔で切ない声を洩らすようになった。

膀胱の肉袋の中で蠢く寄生虫の重さが、だんだんと心地良く感じられてきた。

「あふうう……お股が熱い。オシッコの穴がぴくぴく痙攣してて、何か出そうなのに出ない感覚がずっと続いている。あふう……オシッコの穴を弄りたいい」

キャンディは腰を前後に振りながら尿道の違和感を告白する。媚毒が溶け込んだ内壁はぐちぐちぐちゅに発情し、刻一刻と敏感さを増していた。

しかし——ドロシーは違う。少女は顎を仰げ反らせ、背筋をぴーんっと伸ばした姿勢のまま身動きする事もままならない。呼吸はハッハッ……と浅く、頭から足先まで熱した鉄のように赤くて熱かった。

二十匹もの媚薬虫を浣腸注入されたドロシーは、人体の耐えうる限界ぎりぎりの発情状態をキープしたまま、発狂寸前で放置されている状態だった。腹部を中心に全身が炎のように熱く、針のむしろに横たえられた罪人のごとく感覚器官が鋭敏になっていた。口を開くことすら難儀で、舌を動かしただけでイってしまいそうだった。

「あぐう……あううううー！」

聾唖のごとく、ただ呻くことしか出来ない。

「二人とも、そろそろ媚薬が効いてきた？ 体内から直接摂取する生体媚薬の味はまた格別でしょう？ 年中ビンテージものの強力媚薬で体が発情しっ放しになるのよ。このまま放っておいたら発狂するわ。それを鑑賞するのも面白そうだけど……折角だから、ちよつと遊んであげる。まずは、ドロシーからね」

限界寸前のドロシーの肉体状況をよく知りぬいている癖に、ウルフは優雅な足取りで背後からそつと近付き、汗まみれのドロシーの小振りな胸をぐつと揉んだ。

「おギツ?! ぐひいイイいーッ!!」

ぶしゆううう！ その途端、ドロシーの割れ目から愛液の潮が噴き出した。ねっとりとしたっこい濃い愛液が床に水溜りを作る。胸に触られただけでドロシーはイっていった。

がくんがくん！ 上向いたドロシーの口から透明な涎の筋が大量に流れ落ちる。それは頬を伝い、汗まみれの体をさらに濡らした。

「うふふふ。凄い感度だわ。胸に軽く触っただけでイっちゃった。その感覚に慣れるまでは多分何をしててもずつとイキっぱなしよ？ 歩くだけ、話すだけ、人の話をこうして耳に入れてるだけで……鼓膜の振動だけでイってしまうわ。体内のあらゆる感覚器官が快楽に塗り潰されているようなものだから。このままじゃ辛いでしょから……私が慣らして

あげる」

「ヒッ!! ギヒイイイイ!!」

ウルフの両手が小振りな胸を掴み、背後から無造作に揉みまくる。それだけでドロシーの体は跳ね上がり爆発的なオルガを刻むが、ウルフはさらに熟練したレズタッチで楽器を奏でるようにドロシーの体をかき鳴らし、性感帯という性感帯を刺激して全身をクリトリスのように敏感に磨き上げた。

ドロシーはどこを触っても絶頂に達してしまう、オルガスイッチと化していた。

「おんぎいいいいーッ!! イクっ、イクっ、イクうううう!! うぐっ、ああーッ!! ごほごほっ、うっギイ!? 全身がビキビキに勃起したクリトリスになってるうう!! うっひいいいい!! 死ぬ死ぬっ、死ぬうううう——ッッ!!」

体験版了